

タンネウシ貝塚遺跡発掘調査報告

松田 功

099-41 北海道斜里郡斜里町本町49番地
斜里町立知床博物館

例 言

1. 本論は、町道以久科西4線海岸通り道路改良工事に伴うタンネウシ貝塚遺跡の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、斜里町教育委員会が斜里町の委託を受け実施した。
3. 発掘調査期間、調査体制は下記の通りである。
発掘調査 平成2年5月1日～5月31日
(現場作業)
平成2年6月1日～6月31日
(整理作業)
調査主体者 斜里町教育委員会
教育長 田中輝之
事務局 斜里町立知床博物館
総務課長 金盛典夫
庶務係 鈴木 均
斜里町埋蔵文化財センター
所長 横山博也
担当者 斜里町埋蔵文化財センター
調査員 調査係 松田 功
調査補助員 斜里町教育委員会
臨時職員 滝澤大徳
4. 本論の執筆、図版作成は、松田が行なった。
5. 動物遺存体については、西本豊弘氏(国立歴史民俗博物館)に依頼した。
6. 火山灰の同定は、隅田まり氏(日本大学文理学部)に、岩石の鑑定は、合地信生氏(知床博物館)に依頼した。
7. 発掘および整理にあたって次の方々、機関のご協力、ご助言、ご指導を賜りました。ここに氏名を記し、感謝の意を表したい。(敬称略)大井晴男(北海道大学)、佐藤孝雄(慶応義塾大学)、小合信也(前橋宮林署)、清里宮林署、斜里町建設部、北斗興業(株)。
8. 遺跡位置図には、国土地理院発行の2.5万分の1の地図(しゃり NK-55-31-5-1・2)の一部を使用した。

遺 跡 の 概 要

経 過

タンネウシ貝塚遺跡は1961、1962年の斜里町オホーツク霊園造成事業の工事の際に発見され、その後、1969年5月3日斜里町郷土研究会による遺物の採集、記録調査、1973年8月金盛、西本による現地での遺物採集、分析調査が行なわれ、貝塚の性格、特徴が明らかにされた(金盛・西本、1974)。

この論中でタンネウシ貝塚遺跡はいくつかの小規模の貝塚を総称したものとされており、砂丘全てを被う巨大な規模の貝塚ではないようである。

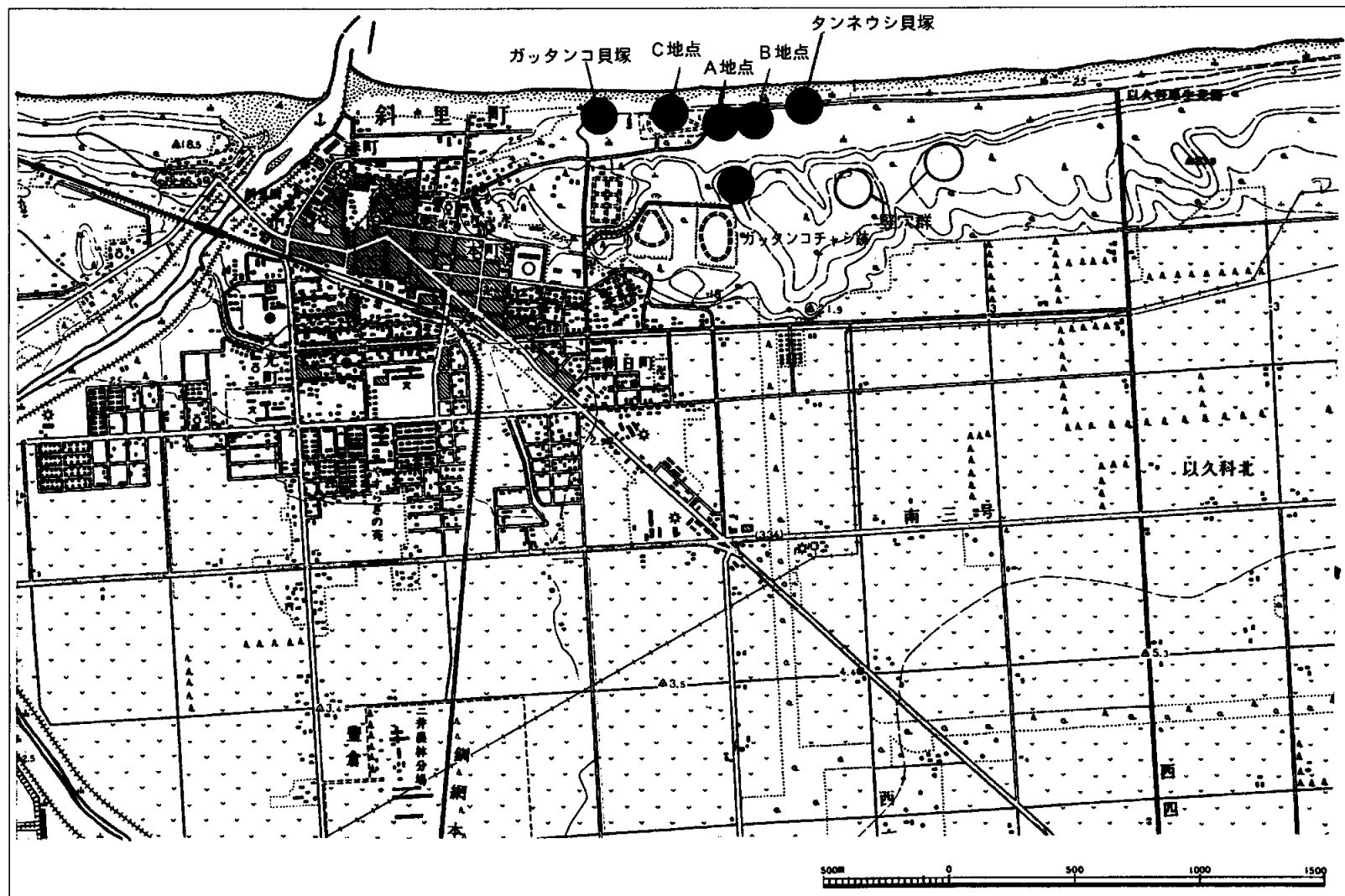
1969年の斜里町郷土研究会の報告では、3ヶ所

A・B・C地点を調査している(第1図)。

今回の発掘調査ではA・B・C地区を掘削した。同じA・B・Cでも位置が違うので第1図を十分参照されたい。

立 地

斜里市街地の東側、オホーツク霊園と火葬場を結ぶ砂丘列上に位置している。北側には、オホーツク海、南側には、ガッタンコ湿原、旧斜里川河床、ガッタンコチャシ跡や続縄文、擦文文化期の竪穴跡がのる砂丘列が存在する。



第1図 遺跡位置図

タンネウシ貝塚遺跡が形成されたのは、火山灰分析結果から判断しておよそ200~300年前のアイヌ期に形成されたものと推察される(詳しい結果は層位のところで述べる)。

タンネウシ貝塚遺跡やガットンコ貝塚遺跡(第1図)がのる海岸に最も近い砂丘列の形成時期は金盛(金盛・西本, 1974)が推察したように火山灰(At-c: Ma-b5に対応する, Me-a: Ta-aに対応する)の発見が鍵を握っているものと思われる。今回の発掘調査の際にMa-b5火山灰(おおよそ今から1,000年前に降下)が確認できるか注意していたが、発見できなかった(今回の発掘最深部は地表から3mほど掘削した標高6~7m)。ガットンコ湿原を挟んでもう1列南側の砂丘内にはこの火山灰が確認できた。

つまり、1,000年前にはタンネウシ貝塚遺跡がのる砂丘列は形成されていなかったか、あるいは、安定していなかったかである。海岸か河口の水域になっていたものと推察できる。

その後、自然現象(台風や洪水)による河川堆積物及び潮流堆積物が砂丘を形成し、海岸並びに、

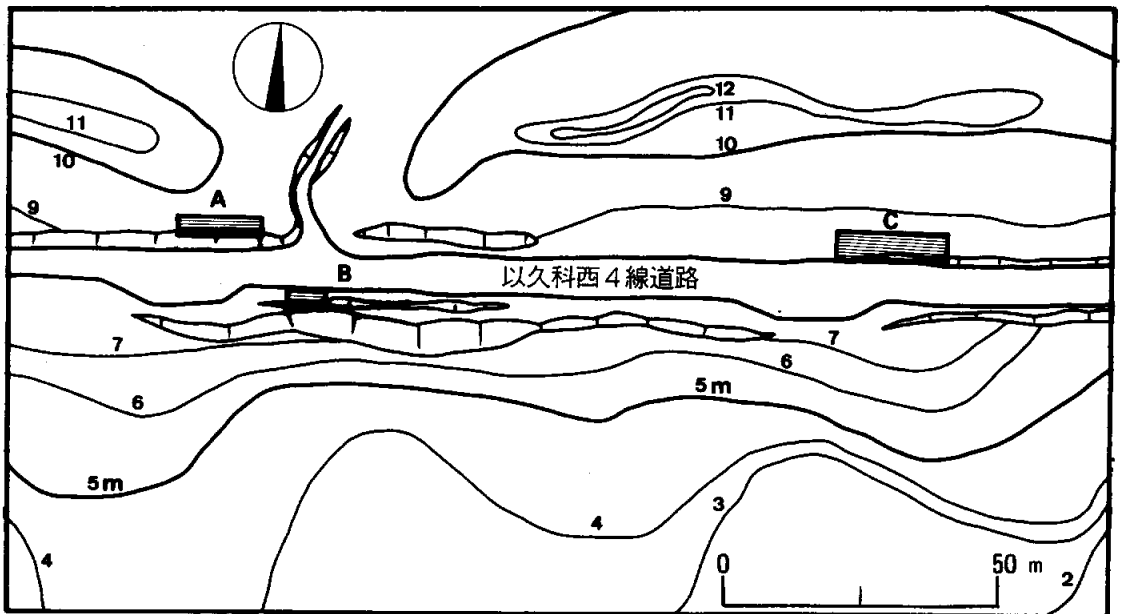
河口の様相を変化させる。砂丘の発達に伴ない河口は東側からより弱い部分(砂丘が安定していない部分)へ河口域を変える。斜里川の流路を探るものとして、斜里町史掲載の明治30年の斜里地図では既にタンネウシ貝塚遺跡以東に河口は書かれていない。

タンネウシ貝塚遺跡成立を考えるにあたって最も重要なテーマは、河口域の変化と砂丘発達の解明である。この要件が満たされなければアイヌ期の文化、生業、交易など不明な点が山積する。

これからの課題として、Ta-a、Ko-c2、Ma-b5火山灰がどの砂丘列に見られるか定量的に検討することである。それから、砂丘砂の粒度分析を行ない砂丘の発達・形成のメカニズムを調査することである。

調査区(第2図)

西側からA・B・C地区と設定した。A地区45㎡、B地区21㎡、C地区100㎡の計166㎡であった。遺跡がのっていた標高は、7~10mであった。全地区砂丘の南側に面していた。

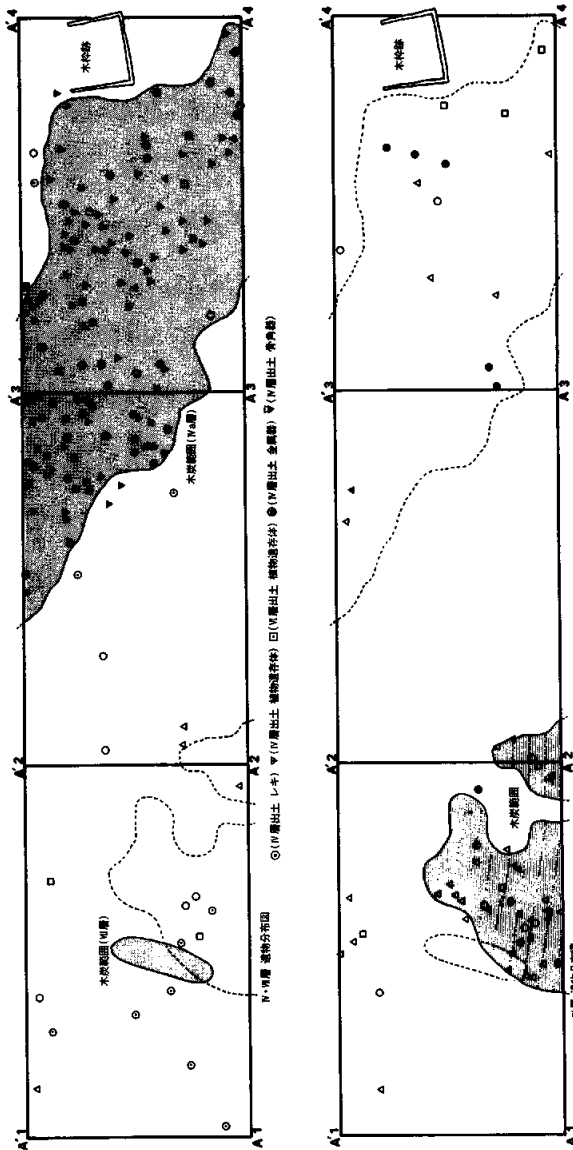


第2図 地形図・調査区

遺構・遺物分布図(第3~6図)

遺構はC地区のみ確認された。建物址が1基、貝塚が2基の計3基であった。その他、木炭など

の広がりも見られた。



第3図 遺構・遺物分布図 (A地区)

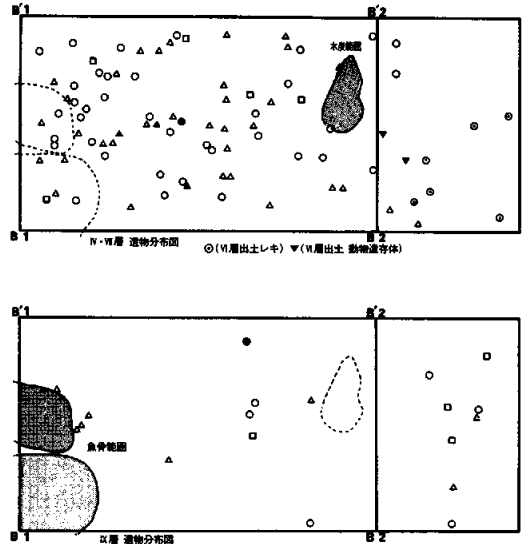
凡例

- : レキ・石器
- ◐ : 金属製品
- ▽ : 動物遺存体
- ◑ : 骨角器
- : 植物遺存体

(IV層出土遺物対象)

- : レキ・石器
- : 金属製品
- △ : 動物遺存体
- ▲ : 骨角器
- : 植物遺存体

(VII・IX層出土遺物対象)



第4図 遺構・遺物分布図 (B地区)

遺物

出土した遺物の内訳は、石器8点、磁器3点、動物遺存体(獣・魚骨など)398点、植物遺存体(木炭など)62点、金属製品51点、骨角器5点、レキ377点、その他不明品2点の計896点であった。

層位 (第7図)

A・B・C発掘地区の掘削の結果、標高7~10mの間でI~X層までの自然層位が確認された。この分層基準の論拠として、腐植土壌であるか、生物による土壌化現象が見られるか、かつ、広範囲に及んでいるかである。

このため局所的にしか見られなかったり、部分的、断片的にしか存在しない層は補助層として扱った。

I層 2つに分層できた。

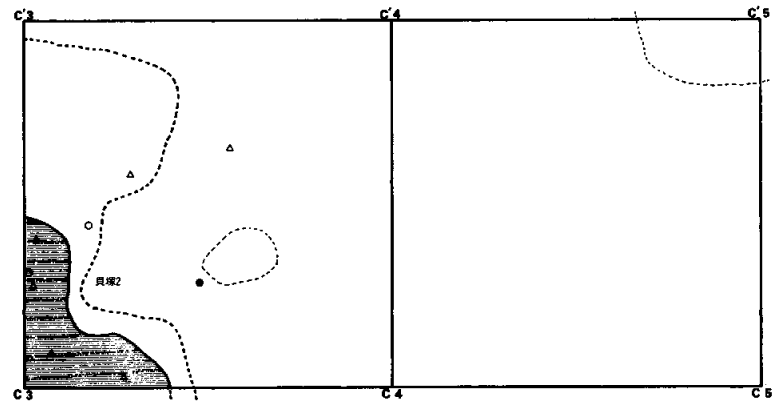
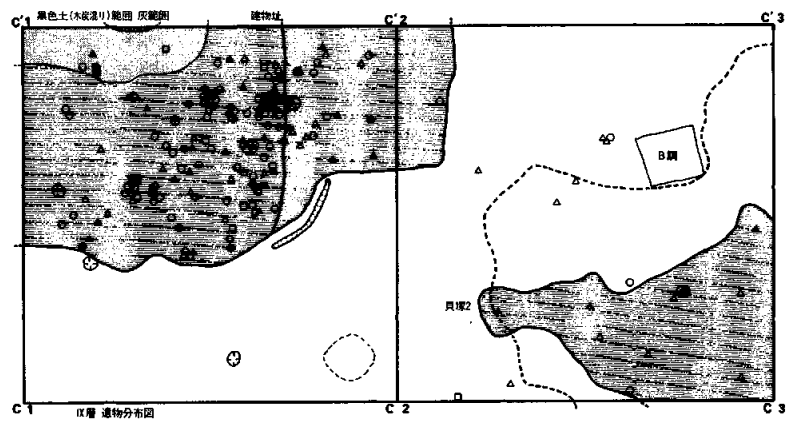
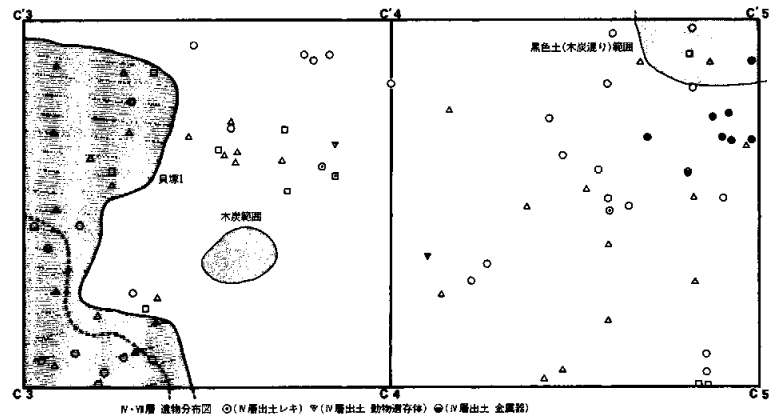
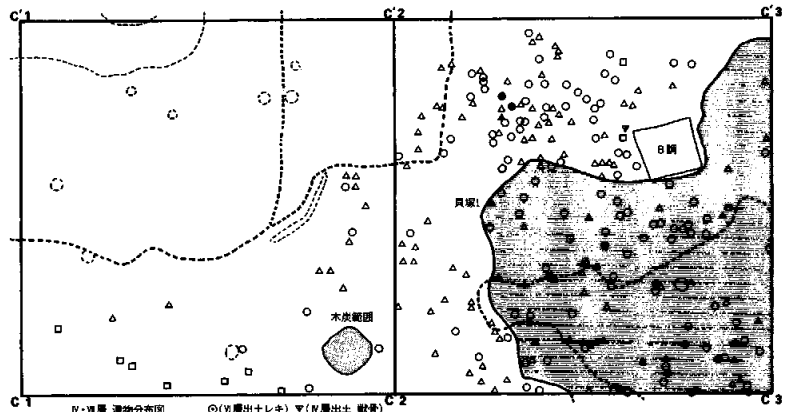
a層 黒褐色腐植土層。原生のトクサなどの植物の根茎が入っている。砂丘が安定化し、現生の草本・木本類が形成された時期。

b層 暗黄褐色砂層。腐植土が見られない砂層。

II層 2つに分層できた。

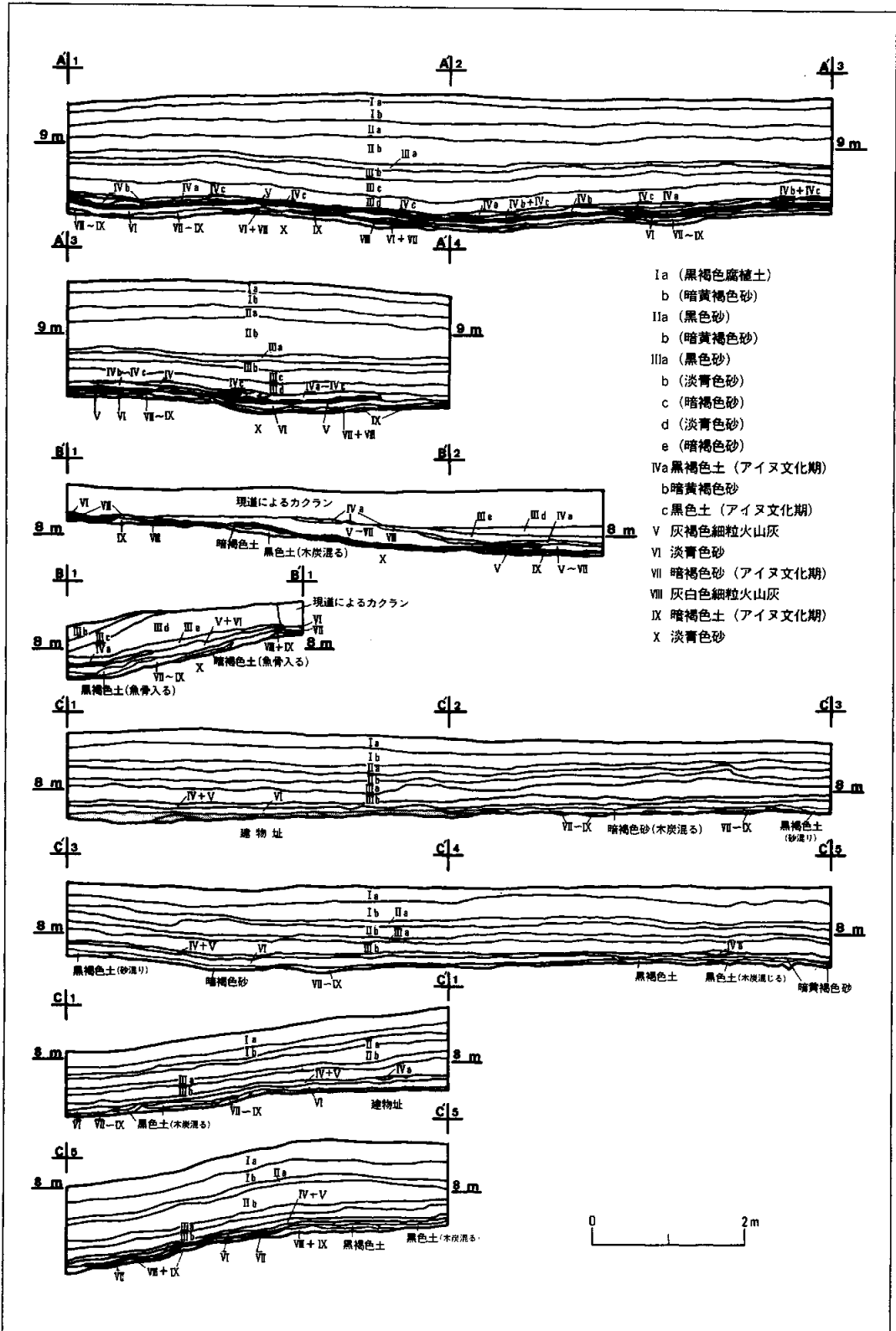
a層 黒色砂層。土化していないため砂地に生息する草本類を中心とした草原が形成されていた時期であろう。

b層 暗黄褐色砂層。層中に薄い数枚の黒色



第5図 遺構・遺物分布図 (C地区1)

第6図 遺構・遺物分布図 (C地区2)



第7図 層位図

砂バンド層が見られるため、数回砂丘安定期があり、草本類が繁茂したのであろう。

Ⅲ層 5つに分層できた。

- a層 黒色砂層。層厚も一定であり、安定した草本群落が形成されていたのであろう。
- b層 淡青色砂層。砂自体が汚れていないため比較的短期間に形成されたものであろう。

c・d層はA・B両地区のみ、e層はB地区のみの局所的な層である。この3つの層は南北方向に伸びる砂丘列形成時（A・B両地区上を結ぶ）の堆積砂層と考えられる。

- c層 暗褐色砂層。僅かな草本類が茂っていたのであろう。
- d層 淡青色砂層。南北方向（A・B両地区上を結ぶ方向）に砂丘が形成された時の砂層であろう。特に、斜面での堆積量が多いことから海風（北風）による堆積作用と考えられる。薄く数枚の黒色砂バンド層がみられたため、砂丘安定期が数回あったものと推察される。
- e層 暗褐色砂層。僅かな草本類が茂っていたのであろう。

Ⅳ層 3つに分層できた。しかし、層厚が薄く、間層になるb層が見られないところではⅣ層として一括処理した。

- a層 黒褐色土層。アイヌ文化期の動物遺存体（貝類、獣骨など）や炭化物（木炭など）が見られた。特に、A地区の東側に多く見られた。
- b層 暗黄褐色砂層。A地区のみの局所的な

分布であった。層厚も薄いため短期間に形成されたものであろう。

- c層 黒色土層。下位のV層火山灰直上に見られた腐植土層。アイヌ文化期の動物遺存体（A地区では貝類が多く、B地区では獣・魚骨が多く出土している）や炭化物、金属製品（鉄片）が見られた。

V層 灰褐色細粒火山灰層。隅田の予察結果によれば、Ta-a（1739年）の可能性が高いとされている。従来は、Me-aとされていた火山灰で、隅田（1989）による結果から、Ta-aに相当することがほぼ明らかになった。

Ⅵ層 淡青色砂層。

Ⅶ層 暗褐色砂層。アイヌ文化期の貝塚1（C地区）が見られた。

Ⅷ層 灰白色細粒火山灰層。隅田の予察結果によれば、Ko-c（1694年）の可能性が高いとされている。従来は、Me-aとされていた火山灰で、隅田（1989）による結果から、Ko-cに相当することがほぼ明らかになった。

従来の発掘報告書では、この2枚の火山灰が分層できない場合一括してMe-aとしていた。上下分層可能な場合は、上部をMe-a1、下部をMe-a2と使い分けしていた。これからは、上部の灰褐色火山灰をTa-a、下部の灰白色火山灰をKo-cとすべきであろう。

Ⅸ層 暗褐色土層。アイヌ文化期の貝塚2並びに建物址（いずれもC地区）が見られた。

X層 淡青色砂層。途中薄く数枚の黒色砂バンド層が見られたが、より深い1m下位まで連続して砂層が続いていたためこの層より下には遺物が出土しないと考え、ベース層とした。

遺 構

建 物 址

工事ならびに発掘調査の計画上、建物址の全体を掘削できなかった。そのため、規模、形態など把握できない面が残った。Ⅵ層の淡青色砂層を掘り込んだところ、木炭混じりの黒色土、黒褐色土が確認され、かつ小石（錘石？）も数多く、それも集中して出土した。

この状況から黒色土層を平面的に広げる掘削方法を行なったところ、長軸が東西方向にある建物址ではないかとの判断をした。

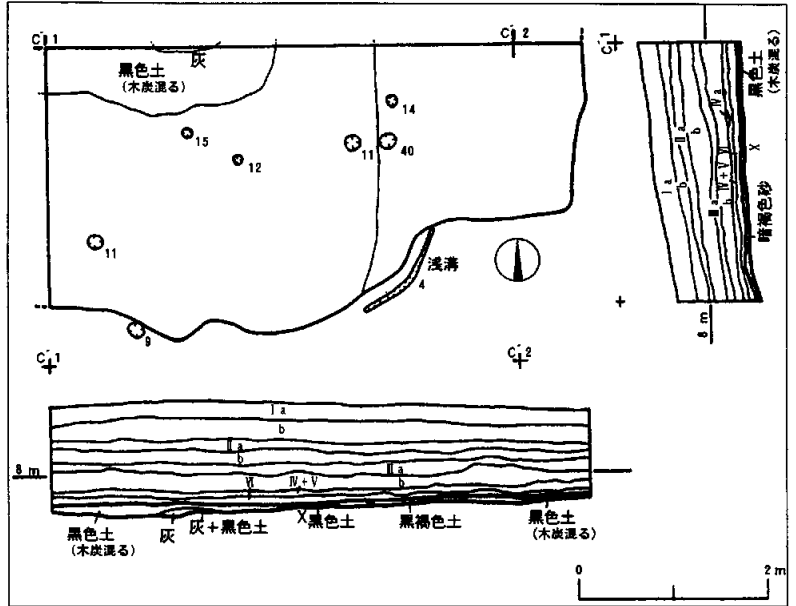
遺 構（第8図）

形態 建物址全体を掘削していないため平面形は不明である。掘り込み面も明瞭ではない。床の部分（平坦面）に僅かの段差が見られた。南東の隅に浅い溝が見られた。

柱穴と考えられた穴は7個確認されたが、そのうち6つは10cm前後の深さで、残りの1つは40cmの深さであった。

ほぼ中央部分と思われるところに炉跡？（木炭混じりの黒色土、灰）が見られた。

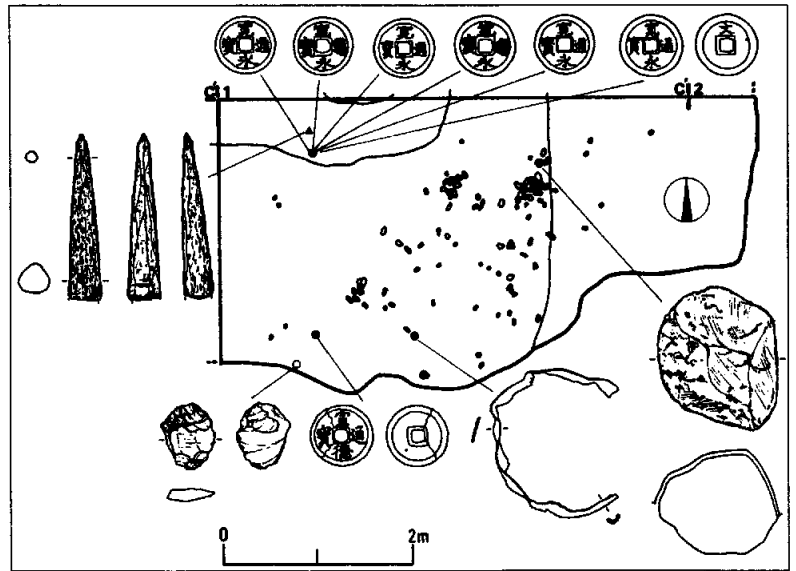
層位 I～VI・X層は確認できた。このため、構築された層は、VII～IX層中である。しかし、VIII層火山灰が見られなかったことを考慮すると、IX層中（1694年以前）に構築されたと考えたほうが妥当であろう。



第8図 建物址

遺物分布状況 (第9図)

出土遺物のほとんどが小石（錘石?）である。小石の集中状況を分析すると、3ヶ所に分けられる。1つは、C'-1ポイントから東に1.5m、南に2mの位置で、小石12個。2つめは、同様に東に2.5m、南に1m、小石の数17個。3つめも、同様に東に3.3m、南に1m、小石の数30個である。この他、炉跡?近くで寛永通寶が6枚重なって出土した。



第9図 建物址遺物分布図

遺物 (第10図)

金属製品 (第10図1～8)

古銭 第10図1は、宣徳通寶（明銭：1624～1633年鑄造）である。2～7は、寛永通寶で、2～6が古寛永（文字および銭形は大きく、内郭は小さく、重量は重い）、7が新寛永の文銭（1668年江戸亀戸鑄造?）と思われる。全て銅銭である。

銅製品 (第10図8) 厚さ0.8mm、幅10mm前後の銅板で、一端に折り曲げられた部分が見られる。用途不明。

骨角器 (第10図9)

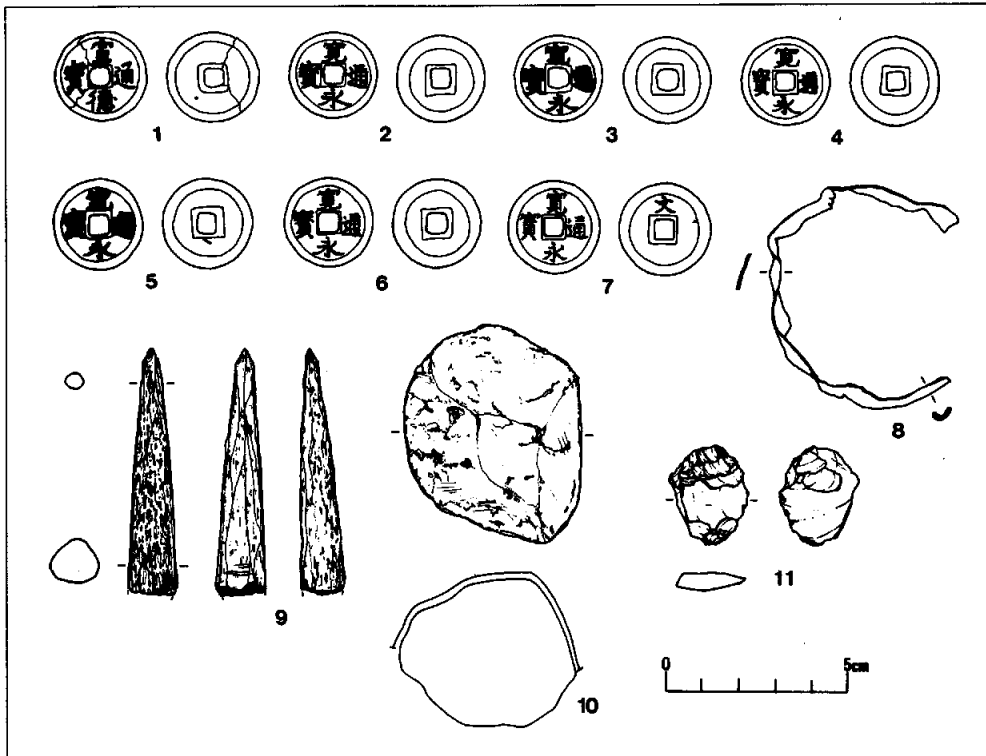
中柄 (第10図9) 中柄の欠損品である。先端部が尖っているため刺突具としての用途も考えられる。海獣骨製。

石器 (第10図10・11)

擦り石 (第10図10) 軽石製で、大きく4つの擦り面が見られる。用途不明。

剥片 (第10図11) 黒曜石製の剥片である。2

次的な搬入物と考えられる。



第10図 建物址出土遺物

貝塚 1

建物址同様、Ⅵ層を掘削したところ、Ⅶ層面から貝（ウバガイ）や獣骨（クジラ？）、魚骨（サケ・マス類）が出土した。この遺物の分布が面的な広がりを見せたためより広げて掘削したところ、東西方向に6m、南北方向に4.8mの不定形を示した貝並びに獣・魚骨層が確認された。ただし、より南側の町道下に続くこの貝塚は、現道工事の際に壊されており、貝塚全体の規模を確認することができなかった。

遺構（第11図）

形態 全体の規模が確認できなかったため不明である。しかし、地形的に見て10m前後の規模のものと考えられる。

層位 Ⅶ層中に形成されていたもので、Ⅷ層火山灰直上までの貝塚を貝塚1とした。より下層のⅨ層中に形成されたものを貝塚2とした。

しかし、貝塚1並びに貝塚2が形成された源はすぐ西側にある建物址であり、出土遺物の構成やその性格は同じものと考えたほうが妥当であろう。

この同じ起源をもつ貝塚を2つに分けた大きな理由は、Ⅷ層火山灰が挟在することにより時間による出土遺物の差が見られるのではないかという推察のためである。

最大厚は14cmである。形成時期は1694年以前（17世紀末）と推察される。

遺物分布状況（第12図）

遺物分布の規則性は見られなかった。加工品のほとんどは、破損品であった。

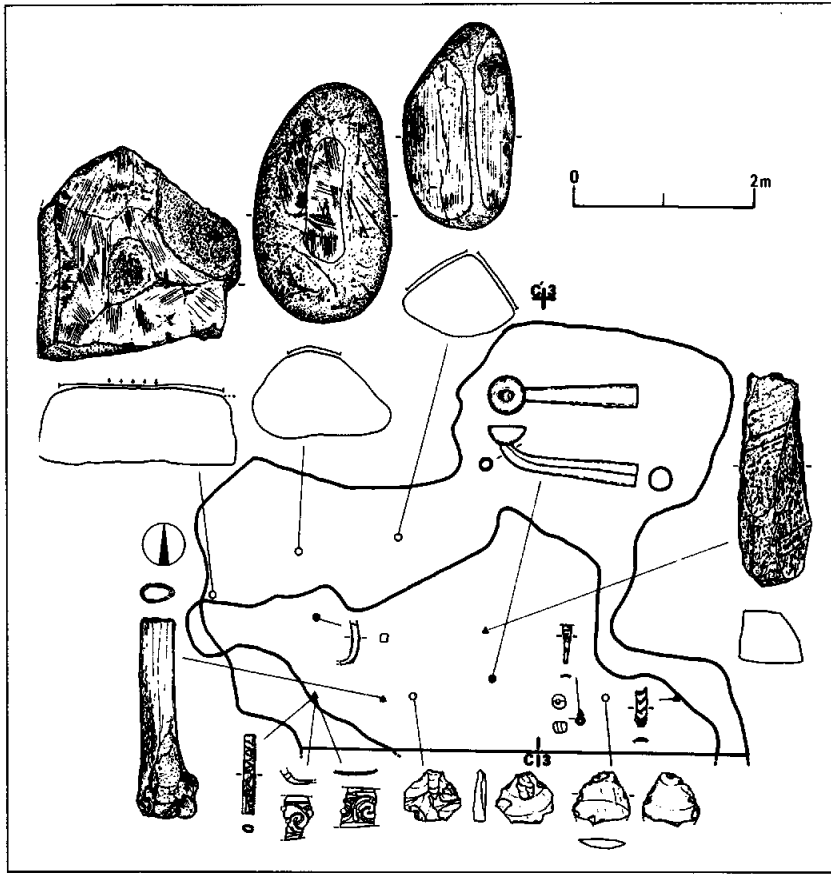
遺物（第13図）

金属製品（第13図1・2）

鉤（第13図1） 先端・基部が欠損しているため全体の大きさは計測不能である。断面は四角である。マレップの可能性もある。鉄製品。

煙管（第13図2） 雁首部分のみ。火皿部からすぐ折曲げて作っている。接合による癒着部分が見られる。銅製品。

ガラス製品（第13図3）



第12図 貝塚1遺物分布図

遺構外出土遺物

金属製品 (第14図)

刀子 (第14図) C-2区、VII層出土。棟・刀区を通じて緩やかに曲線を描いている。片刃である。先端部 (銚子) は欠損している。鉄製品。

骨角器 (第15図1~4)

中柄 (第15図1・2) 1は、A-2区、IV層から出土し、先端部は細く、薄く作り出している。断面形態を観察すると体部並びに基部は、ほぼ円形に近いが、先端部に向かうにつれ楕円形になる。基部の肩の作り出しは明瞭である。海獣骨製品。2は、A-2区、IX層から出土し、先端部と基部の一部が欠損している。体部から先端部に向かうにつれ、細く、薄く作り出すようである。断面形態を観察すると、全体を通じて楕円形である。基部の肩の作り出しは明瞭である。海獣骨製品。

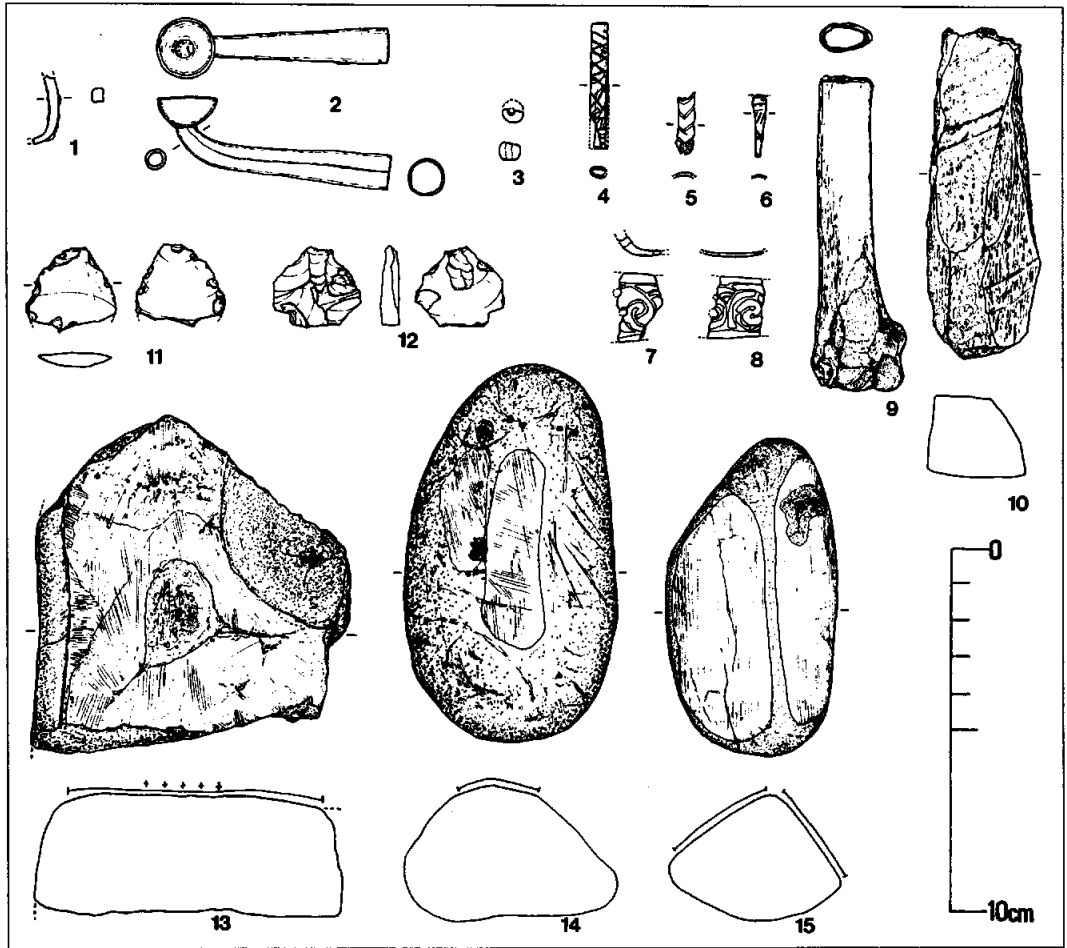
刻線入り骨角器 (第15図3) B-1区、IX層出土。刻線文様をもつ骨角器の破損品である。貝塚1で出土したものと同様焼けて白くなっている。環状の製品となるもので、装身具の一種と推察される。

素材 (第15図4) A-3区、IV層出土。上端に向かうにつれ細く、薄く切断している。平面的には三角形。銚先や中柄を作る素材であろうか。海獣骨製品。

石器 (第16~20図)

軽石製石器 (第16図1~7)

火皿 (16図1・2) 1は、B-1区、VII層出土。破損品である。全体の器形並びに受け部の形は円~楕円形になるものと推察される。全面磨いて調整している。受けの部分に焼けた跡が見られる。2は、B-1区、VII層出土。破損品である。全体の



第13図 貝塚1 出土遺物

器形並びに受け部の形は四角～長方形になるものと推察される。隅に径2cm前後の穴を作り出している。全面磨いて調整している。受けの部分に焼けた跡が見られる。

すり石 (第16図3～7) 3は、C-4区、VII層出土。一面のみを擦っている。4は、A-1区、VII層出土。一つの面を平坦にし、他の面は丸くくついている。平坦面には、径1cm弱の窪みが見られる。5は、A-1区、IX層出土。大きく三つの平坦面を作り出している。断面形は三角形である。一つの面にV字状の刻みが見られる。6は、C-2区、VII層出土。全面を擦っている。7は、B-1区、VII層出土。全面を擦っている。

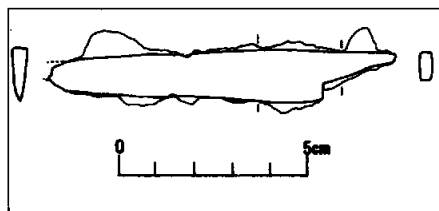
軽石以外の石器 (第17～20図)

砥石 (17図1・2) 1は、B-1区、VII層出土。砂岩製。2は、A-2区、VII層出土。部分的にた

たかれた窪みが見られるため台としての用途も考えられる。砂岩製。

すり石 (第18図1～6) 1～5は、硬質頁岩製で、6は、安山岩製である。1は、B-1区、VII層出土。2は、B-1区、IX層出土。両者とも一ヶ所のみ平坦面を作り、他の面は原石面のままで丸い。断面形は、半月状である。3は、C-2区、VII層出土。4・5は、B-2区、VII層出土。それぞれ部分的に数面擦られている。5は、刃物による溝が見られるほか、両側縁にたたきによる潰れ痕が見られる。6は、B-2区、VII層出土。棒状の石を使っている。

有孔石器 (第19図1・2) 1は、B-2区、IX層出土。全面擦られている。穿孔は上下2方向からである。用途不明の軽石製である。2は、C-4区、VII層出土。一部欠損している。部分的に擦ら



第14図 遺構外出土遺物（金属製品）

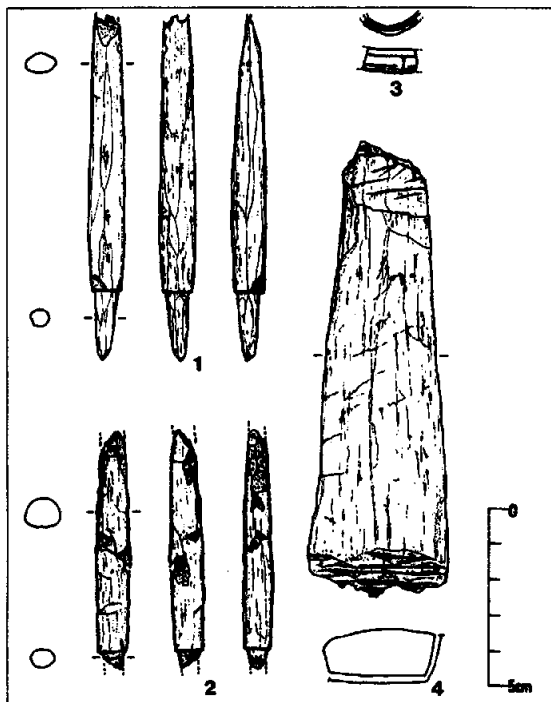
れている。穿孔の方向、方法は不明である。穴は石の厚みが薄いほうに作られている。このことから判断して、錘としての用途が考えられる。硬質頁岩製。

ナイフ（第20図） A-1区、IV層出土。欠損品。2次的な搬入物と考えられる。縄文時代晩期に見られる安山岩製ナイフであろう。

まとめにかえて

今回の調査では、タンネウシ貝塚遺跡全体を含む砂丘全域を発掘したわけではなく、町道改良工事対象区域内の166㎡の面積のみを発掘しただけで、氷山の一角の発掘といえる。

しかし、発掘調査面積は少なくとも成果は十分に得られた遺跡であった。その中で最も大きな収穫は、遺跡の時期を決定し得る2枚の火山灰（上層の火山灰はTa-a：1739年降下、下層の火山灰はKo-c2：1694年降下）の所属がおおよそ判明したことである。このことは、17世紀末から18世紀初頭における歴史や文化の解明に良好な研究資料を提供したといえるであろう。



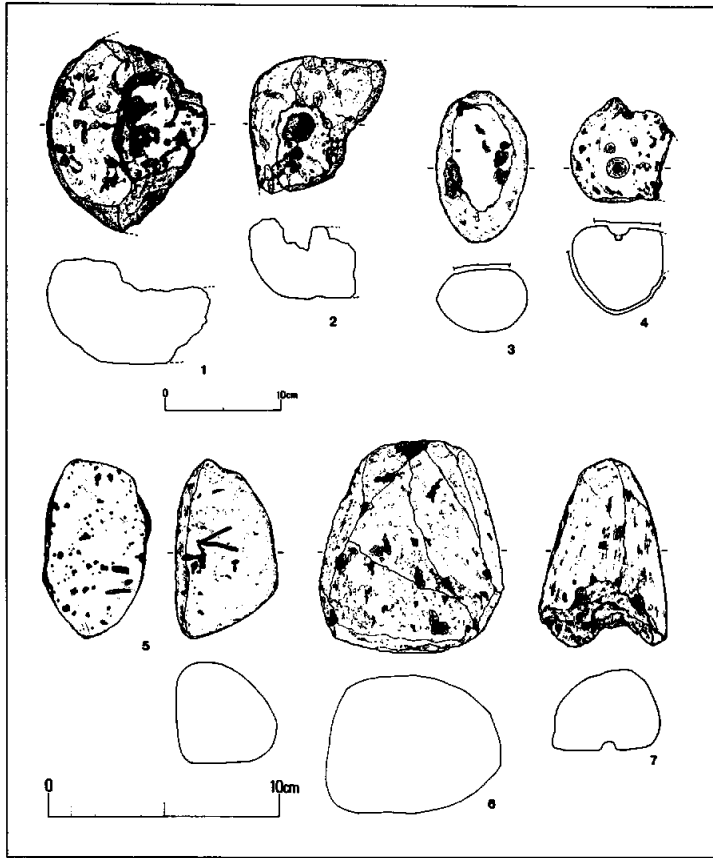
第15図 遺構外出土遺物（骨角器）

1670年のシャクシャインの乱以前に、松前の商船がオホーツク海岸において品物の交換を行っていたことは『津軽一統志』に直接的ではないが書かれている。当時は、稚内に宗谷場所が置かれており、斜里と稚内間とで交流はあったものと推察され、このことが遺跡から出土した遺物（古銭や鉄製品など）に反映していると思われる。

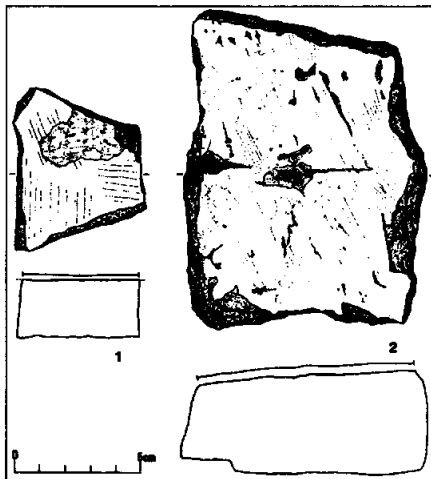
参考文献

金盛典夫・西本豊弘、1975：調査ノート 斜里町
タンネウシ貝塚採集品、北海道史研究7
古原敏弘・森 広樹・久保 泰・谷岡康孝他、
1980：瀬田内チャシ跡遺跡発掘報告書、北
山町教育委員会
松崎水穂・斉藤邦典・藤田 登・前田正憲他、
1983：史跡 上ノ国勝山館跡 IV 発掘調査
概要報告書、上ノ国町教育委員会
高橋和樹他、1986：ユオイチャシ跡・ポロモイ
チャシ跡・二風谷遺跡埋蔵文化財発掘調査報
告書、北海道埋蔵文化財センター調査報告26
松谷純一、1986：重兵衛沢2遺跡発掘調査報告書、
礼文町教育委員会

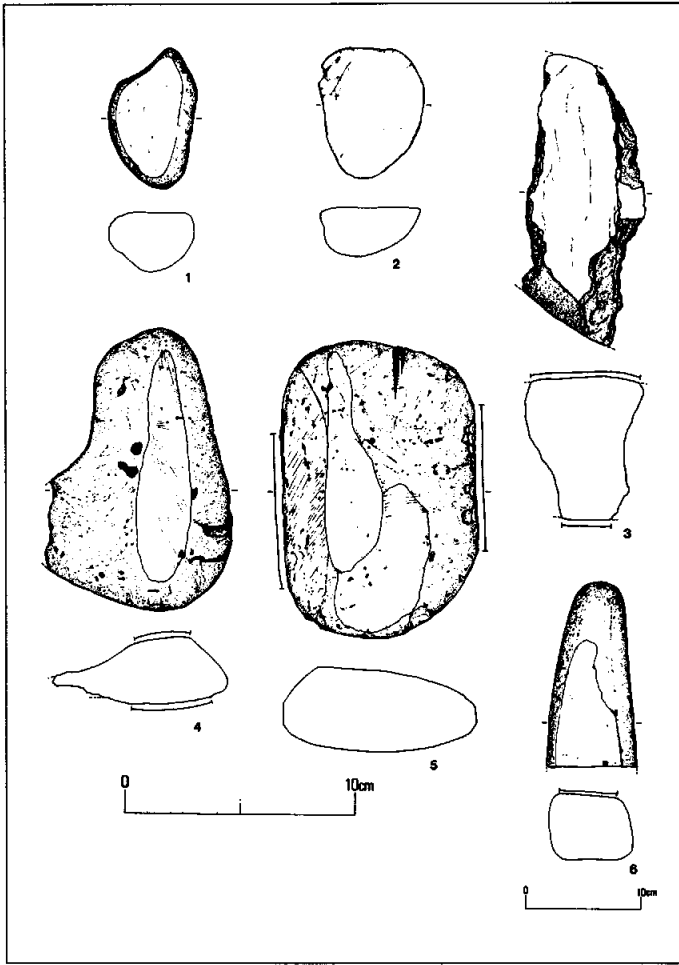
佐藤一夫、1987：弁天貝塚 I 発掘調査報告書、
苫小牧市埋蔵文化財調査センター
佐藤一夫・宮夫靖夫・工藤 肇・渡辺俊一、1988
：弁天貝塚 II 発掘調査報告書、苫小牧市
埋蔵文化財調査センター
豊原熙司・藪中剛司、1989：イルエカシ遺跡発掘
調査報告書、平取町遺跡調査会
米村哲英他、1989：フレトイ貝塚発掘調査報告書、
小清水町教育委員会
遠藤邦彦・隅田まり・宇野リベカ、1989：北海道
東部の完新世後期テフラ層序とその給源火山、
地質学雑誌 98, 4



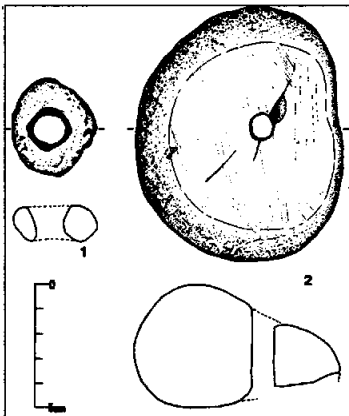
第16図 遺構外出土遺物（石器1・軽石製石器）



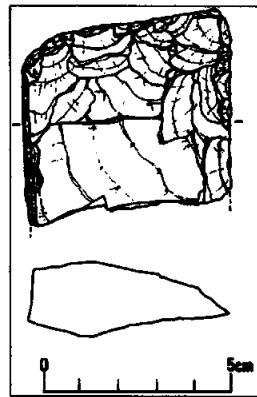
第17図 遺構外出土遺物（石器2・砥石）



第18図 遺構外出土遺物（石器3・擦り石）



第19図 遺構外出土遺物（石器4・有孔石器）



第20図 遺構外出土遺物（石器5・ナイフ）

表-1 タンネウシ貝塚出土骨製品リスト

層 位		出 土 区	種 名	図 版 番 号
建物址	覆 土	C-1	クジラ	10-9
貝塚1	黒褐色土	C-2	ト リ	13-4
	灰褐色土	C-3	〃	5
	〃	〃	〃	6
	〃	C-2	〃	7
	〃	〃	〃	8
	〃	〃	アホウドリ	9
	〃	〃	クジラ	10
	IV a	A-2	〃	15-1
IX	〃	〃	2	
〃	B-1	海獣骨?	3	
IV c	A-2	海獣骨	4	